

AGCグリーンテック(株) 代表取締役社長 安井一郎

理想の旗を掲げて農業経営者と ともにあるべき社会を作りたい

温室用フッ素樹脂フィルム、エフクリンの製造・販売を手がける

AGCグリーンテック(株)。発売から20年を迎えるが、いまや国内だけでなく海外の施設園芸農家にも支持され、マーケットを拡大している。

世界各地を飛び回る安井一郎社長は、この度農業経営者の招きで米国アリゾナ州とテキサス州を視察した。農業経営者の事業規模もさることながら、経営に取組む姿勢や環境に刺激を受けたという。

安井社長が感銘を受けた、農業経営者のあり方について話を聞いた。

自ら率先して変わることに する米国の農業経営者

昆吉則(本誌編集長) 7月16日に

開催いたしました弊誌主催のイベントにご支援いただきました。当日の模様については、今月号の48ページでご紹介しておりますので、当日来場されなかった読者の方々にご覧いただきましたと思います。さて、御社のフッ素

的な農業をやるうとしていの方々が

刺激を受けました。印象的だったのが、農業経営に取り組む姿勢ないしマーケットの変化に対する見方、考え方ですね。

昆 と言いますと?

安井 日本先進的な農業経営者の方々にはあてはまらないかもしれませんが、あえて申し上げますと、日本の農家や農業関係者の場合、変わっていく社会環境やマーケットに対して現状をどこまで維持するか、あるいはその痛みをどこまで緩和できるか、という発想から行動していると思います。変化を端から拒絶しているといえはいでしょうか、

昆 おっしゃる通りですね。

安井 一方、お会いした米国の農業経営者の方々のみならず海外では、外部環境が変わることは必然で、そ

の変化を抵抗なく受け入れます。そ

の上で、変化に対して自分がどう変わるかという考え方をしているんですね。もちろん、そのリスクを経営者ひとりですべて背負うのはつらいですから、州政府や研究機関、あるいは企業からの援助などを求めます。しかし、原点には変わっていく環境に対して、より早く自らの経営を対応させるために、援助を求めらるんですね。

昆 本誌読者の多くは、米国の農業経営者に負けないぐらいの攻めの姿勢を持っています。実際、北海道や東北など、地域では規模拡大を見越して積極的な投資を行なっているようです。その意味では、経営者層は元気です。しかし、ほとんどの農機、資材、肥料メーカーやお役人や農業団体などの農業関係者は、競争に負

けると思い込んでしまっているわけ
です。結果、やる気のある経営者の
足を引っ張ってしまっているのです。
今回、米国でお会いした農業経営者
はどういった方々ですか？

安井 トマトのハウス栽培を行なっ
ている方々です。当社の商品を使っ
てはおりませんが、ヨーロッパでの
当社の導入実績を知って声をかけて
くれました。彼らは5年先、10年先
のマーケットニーズを先取りしたハ
ウス栽培をしようと真剣に考えてい
まして、そのプロジェクトに当社も
参加してほしいという要請があった
のです。

昆 プロジェクトというと、ほかに
もメンバーがいるのでしょうか？

安井 このプロジェクトについてい
えば、アリゾナ大学のほか、世界に
冠たる企業、しかもその企業は、農
業外の企業で資金提供はもちろん、
技術面でも参画しています。省エネ
や環境制御といった部分で、それぞ
れの立場でかなり踏み込んでサポー
トしているんです。

当社であればフッ素樹脂フィルム
を使う、使ってもらおうという関係だ
けではなく、そのバックボーンにあ
る技術を活かして「もっと何かでき
ないのか？」そしてこのプロジェク
トと一緒に成功させようじゃない
か」と積極的に働きかけてきます。

要するに、彼らは自分の力でビジネ
スパートナーを探し、リスクを低減
する方法を探し、仲間作りをしてい
るんですね。

昆 仲間作りもジャンルも国境を越
えているんですね。それにしても、
なぜトマトなのですか？

安井 現在、米国ではサルモネラ菌
に感染したトマトによる健康被害が
発生しています。そんな中で、今の
栽培技術では、20〜30年後には安全
な食料を供給しきれないし、マーケ
ットの要求にも応えられないからこ
そ、今、新しい技術を導入すれば、
ビジネスチャンスになりうるのだと
いう認識を農業経営者も企業も共有
しているんですね。

昆 米国のトマトは一時、安価なメ
キシコ産、カナダ産に駆逐されかけ
たのですが、品質の高いものづくり
に取り組んだ結果、再びマーケット
からの支持を得られています。しか
しさらに新たなピンチに際して、農
業経営者たちが生き残ろうとしてい
る。しかも信頼できる仲間と一緒に。
日本にも「産学協同」はありますが、
米国では農業がきちんとビジネスの
問題としてとらえられているからこ
そ、企業や資本が健康的な形で参入
している。農業発展のための社会的
な素地があるのは実にうらやましい
ところですね。



安井一郎

■プロフィール（やすい・いちろう）

1959年東京都生まれ。81年慶應義塾大学経済学部卒業後、旭硝子(株)入社。加工硝子部名古屋支店勤務を経て、84年愛知工場に転勤、自動車用硝子・樹脂成形品販売等に携わる。94年化学品事業本部・新規事業部に異動、その後化学品事業本部・新規事業推進室グループリーダーを経て、2000年化学品事業本部・フッ素樹脂事業統括グループリーダー、また子会社・旭硝子プロロポリマーズ(株)取締役を兼務。02年旭硝子グリーンテック(株)代表取締役役に就任し、現在に至る。

<http://www.f-clean.com/>



今やれることだけでなく 将来の可能性を見据えて

昆 御社のオフアーに対する経緯はうかがいましたが、どのようなことが求められたのでしょうか？

安井 機密事項もありますので、詳細は申し上げられませんが、たとえば当社のフッ素樹脂フィルム「エフクリーン」を使って何ができるか、ということを持ちかけられましたね。そうですね……、たとえば「安全性の問題をクリアするために、菌に汚染されない完全閉鎖空間としてのグリーンハウスにはできないか？」「ハリケーンが来ても飛ばされない形状にはできないものか」とか、あるいはトマトも生食用ではなく、医

薬品原料として考えた場合、「医薬品に必要な物質生成に効果的な光線だけをグリーンハウス内に取り入れることができないだろうか」といったような、今は難しいけれど、将来的には実現可能な技術について、「お前たちにもできることはあるんじゃないのか？」と随分けしかけられました（笑）。

昆 ほう、それは面白いな。

安井 加えて環境に対する意識は、農業経営者だけでなく、参画する企業も関心が高い。施設園芸はエネルギー負担が大きく環境に負荷をかけるといわれているけど、むしろグリーンハウスはエネルギーを供給する場所にすべきだ、というふうな発想も進んでいる。光合成に不必要な光線から電気を起こし、しかも売電するということ考え方もあると提案したところ、すぐに理解してもらえました。何度も環境の変化という言葉を使いましたが、彼らは自分たちが住む地球を持続可能なものにしていくかという変化さえも含んでビジネスモデルを作ろうとしています。

昆 農業はお天道さまの力を最大限に引き出す方法です。だけど、日本の、特に稲作についていえば、最もエネルギー消費型の農業をしてしまっている。そう考えると、そんな状況下で食料問題を論じること自体、

そもそもナンセンスですよ。また、農業そのものの付加価値、夢を創り出すような発想が日本の農業経営者たちから、生まれることはないでしょうか。本当に日本ではありえないの？ と問いかけていますね。

安井 農業経営者に限らず、農協でもお役人でも誰でもいいのではないのでしょうか。「社会はこう変えていかなければいけない、オレはこう変えていく」という明確な意志を見せ、そして「この指止まれ！」と言ったらついてきてくれる仲間を見つけて一緒に取り組めていけるようなシステムにしていきたいですね。当社も微力ではありますが、理想の旗を掲げて前に進みたいと思っています。

小さい施設園芸業界から 日本を変えるシステムを

昆 とところで、御社の主力商品であるフッ素樹脂フィルムのエフクリーンは、以前は農水省が定めた農業資材の一般的な基準から外れてしまうため、施設園芸の農家が導入したくとも補助金はなかなか受けにくく、経営者自身の自己投資によるものだったそうですね。

安井 たしかに、かつては農業資材については、その価格面ばかりが重視されて決められる傾向があったの

でそういうこともありました。現在では長期的な栽培上のメリットがあるのを認められるようになっております。エフクリーンは、メンテナンスフリーで、20年から30年の長期展張が可能です。また、物性変化もしないので、堆肥場のような場所でも劣化することなく、グリーンハウス内の環境も安定させられます。現在は暖房効率を高めてエネルギーコスト削減を達成できるように、エフクリーンの2重被覆の導入を推進しています。

昆 今後の展望を教えてください。

安井 先ほどの2重被覆ともかかわるのですが、昨年環境省に乗り込んで施設園芸だからこそできる環境改善について話をしてまいりました。たとえば国が、省エネに取り組んだ農家からCO₂排出権を買い取るというように、農家に補助金をお願する以外の支援システム作り当社も寄与したいと考えております。小さな施設園芸業界からではありませんが、社会を変革していく旗を掲げ、仲間作りをしながら世の中を変えていければと思っています。

昆 知識集約型の先進国型農業を実現する上でも、御社のお力は必要です。仲間として、読者、私たちがかわっていききたいと思っていますので、今後ともよろしくお願いします。